

氏 名	堀 田 忠 夫 ほり た ただ お
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 508 号
学位授与の日付	昭 和 49 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	農業における産地間競争の経営経済学的研究

(主 査)
論文調査委員 教授 菊地泰次 教授 上村恵一 教授 頼 平

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、農業における産地間競争と主産地形成のメカニズムを体系的に解明したものである。著者は、規模経済・経済立地・不完全競争の各基礎理論を有機的に結合して、これらの問題の解明に役立つ理論的モデルを構築している。さらに、制度的干渉の最も少ない販売市場をもつ主要果実について、主として大阪市場を対象とする産地間競争および主産地形成の展開過程を分析して、上記の理論的モデルの有効性を実証している。

本論文は9章からなっている。第1章では、産地間競争理論の展開過程を回顧して種々の問題点を指摘している。なかでも産地間競争の主体的な側面をなす主産地形成行動についてこれまで十分な分析がなされていない点を指摘し、これを受けて第2章から第4章にかけてまず「主産地形成」概念を究明し、ついで主産地の経済構造と最適販売量の決定行動とを類型化している。さらに主産地間の予測的相互依存関係を取入れた動学的な産地間競争分析モデルを構築している。

第5章では、主要果実について産地間競争の具体的な形態を類型化し、各主産地の競争力を規定する外的・内的諸要因を究明している。各主産地は立地条件によって制約されながら、様々な数量的・品質的成長策を用いて競争力を強化しているが、第6章では、これらの産地成長策とその同産地および競争産地に及ぼす経済効果について検討している。なお、果実部門では供給過剰段階に入り、さらに国際競争の激化に伴って、広告活動が有効な販売戦略として用いられるようになってきているが、第7章では、各果実の市場構造とそれに対応した産地の広告活動の実態を分析し、その経済効果を規定する諸要因を明らかにしている。

第8章では、果実とくに産地シェアの変動の特徴的なリンゴをとりあげて、戦後、現在に至るまでの産地間競争の展開過程を各産地の生産量シェアと市場シェアの変動としてとらえ、その変動要因を解明している。さらに第9章では、産地移動の顕著なイチゴをとりあげて、大阪市場を対象とする新旧産地の交替過程を追跡し、産地間競争力を規定する各要因の相対的影響力が、わが国の経済発展とともにどのように

変遷してきたかについて究明している。

論文審査の結果の要旨

わが国農業において、これまで産地間競争と主産地形成の重要性が強調されてきたにもかかわらず、これらの問題を理論的かつ体系的に取扱った業績はあまりみられない。

本論文の第1のメリットは、近代経済学的手法によって農業における産地間競争と主産地形成のメカニズムに関する理論的分析モデルを構築したことである。その際、従来の研究が諸立地要因を異にする個別経営間の完全競争を前提とした市場均衡論的分析モデルによって、産地間競争のメカニズムをとらえようとしたのに対し、本論文は産地間競争を「主産地」という機能的組織体間の不完全競争としてとらえているところに特色がある。さらに主産地間の予測的相互依存関係を取入れて、各主産地が生産面・流通面における準内部経済を追求するためにどのような経営戦略を採択すべきか、またそれが各主産地の競争力にどのような効果を及ぼし、どのような産地シェアの変動をもたらすかという問題について動学的な産地間競争分析モデルを構築している。なかでも主産地の販売戦略としての広告活動に関する研究は、農業経済学界における先駆的な業績といってよいであろう。

第2に本論文は、単に理論的分析にとどまらず、主要果実について産地間競争の具体的な形態を類型化して、各主産地の競争力を規定する外的・内的諸要因を究明している。また産地間競争と主産地形成の問題が典型的に現われている諸果実部門を対象として、産地間競争の歴史的展開過程や主産地の様々な成長方策について実態調査や統計資料の解析を行ない、上記理論的モデルの有効性を実証しており、これらの点は大いに評価されてよい。

以上のように、本論文は農業における産地間競争と主産地形成のメカニズムを体系的に解明する上で多くの新知見を加えたものであり、農業経済学に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。